

心学道話を素材にした明治前期の日本語学習資料 —欧米人4名によるテキスト5種の紹介—

松 本 隆

【要旨】

心学道話を素材にした日本語学習資料が明治前期に相次いで出版された。小稿では欧米人4名による5種の資料を紹介する。オニールとイビーは同じ『鳩翁道話』を素材にしなが、前者は木版刷りの和本を読むための教材を作り、後者はローマ字テキストで日常表現などを速習する教材を2種類作成した。また『心学道の話』を素材に、ノックスは活版印刷の和本を読みながら基礎的な漢字が学べる教材を作り、インブリーはローマ字テキストの文脈内で文法が理解できる教材を作成した。これらは、口語体の秀逸な素材を、異なる目的で個性ゆたかに加工した教材群である。

【キーワード】

オニール (John O'Neill) 、イビー (Charles Samuel Eby) 、ノックス (George William Knox) 、インブリー (William Imbrie) 、柴田鳩翁^{きゅうおうどうわ}『鳩翁道話』、奥田頼杖^{らいじょうみち}『心学道の話』

付録、電子化資料（クリックして見る）

- ① [オニール版『鳩翁道話』二の上 1874年](#)
- ② [イビー版『鳩翁道話』一の上 1881年、一の上下 1892年](#)
- ③ [インブリー版『心学道の話』1889年、ノックス版 1882年の一部情報を含む](#)

1 日本語学習書として様々に加工された、話し言葉そのままの心学書

心学道話は、人生哲学・処世訓を説く舌耕文芸であり、江戸後期に隆盛をきわめ、講述筆録も多種版行された。講者の話しぶりもそのままに口語体で記された心学書は、開国後、日本語の話し言葉を学ぶ素材として外国人に注目された（金沢 2013）。小稿では、明治の初めから半ばにかけて、日本語学習用に様々に加工された『鳩翁道話』と『心学道の話』を紹介する。付録として、これら教材の文字情報を添えた。

加工の対象となった『鳩翁道話』は、心学道話の名人と謳われた柴田鳩翁（1783～1839）の説教を聞き書きしたもので1835年に初版が刊行された。鳩翁に負けず劣らず説教が巧みであった奥田頼杖（1792?～1849）の『心学道の話』は1842年の初版である。『鳩翁道話』は現在に至るまで読み継がれ、表記を現代風に改めた版（柴田 1935, 1970, 1971）は今も容易に入手できる。また今日『心学道の話』を読むには『心学道話全集』所収の現代表記版

(加藤 1928) を、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧するのが最も手軽であろう。『鳩翁道話』もこの全集の第1巻に収められている。

心学道話には、武士から丁稚にいたるまで老若男女さまざまな人物が登場し、色々なやりとりを繰り返しながら、物語が展開していく。鳩翁も頼杖も、各登場人物をそれらしい言葉づかいで演じ分け、聴衆の心情に訴えかけながら、笑いと涙のうちに儒教的な教訓を諭し、聞き手を自省へと導いた。地の文となる講者の語り口は、当時の丁寧な話し方として一般的であった「～でござります」体を基調としている。

心学道話を一言で表現すると面白くてためになる説教である。例えば、後述するノックス版『心学道の話』の21話中20番目に「The honest samurai」と題する物語が収められている。これは古典落語の「井戸の茶碗」と話材を共有するもので、登場人物や展開がやや異なる以外、大筋において同じ話である。心学道話を、落語のような説教、あるいは道徳じみた落語と言っても的外れではあるまい。実際『鳩翁道話』には小咄や、落とし咄の類が随所に仕掛けられており、聞く人を飽きさせない工夫を凝らしている。心学道話は落語や講談と同種の話芸であり(関山 1974、延広 1974)、その優れた話芸の記録が『鳩翁道話』や『心学道の話』なのである。三遊亭円朝の落語の速記本が言文一致体に示唆を与えたとしてよく注目されるが、『鳩翁道話』や『心学道の話』も速記本に引けをとらないほど鮮やかに話し言葉を写し取っている。

心学書は位相性ゆたかな表現のモデルに満ちており、例えば講者の語り口(地の文)を手本にすれば、多くの人々を前にした状況での丁寧な話し方を学ぶことができるし、各登場人物の発話(せりふ)に注目すれば、状況や感情などに応じた表現の使い分けを知ることができる。このように心学書は話し言葉の学習素材として優れているのみならず、内容自体の面白さゆえ読み物としても学習者の興味を喚起しやすい好素材といえる。

2 口語体の文章を日常表現・読解・漢字の学習書に加工

このたび調査したところ、心学道話を加工した明治前期の学習資料には、少なくとも次頁の表にまとめた5種類(ア～オ)のあることがわかった。本節では、これら5種の資料を相互に見比べながら、それぞれの特徴を概観していきたい。

一口に心学書と言っても、文語体で抽象度の高い内容を論じたものから、逸話や譬え話を平易に語った講述筆録まで多種多様である(木坂 1980)。日本語の学習素材に選ばれた『鳩翁道話』と『心学道の話』は後者の代表格といえる。

このような口語体の文章の特徴を、そのまま話し言葉や日常表現の学習に利用したのが、下記のイ・エ・オである。3点ともローマ字に転写した本文に注釈を加えたもので、仮名や漢字の学習には一切ふれていない。

《心学道話を素材にしたテキスト5種》

- | 刊年 | 素材 | 編著者 | 加工方法 | 下段は英書名 |
|----------|---|----------|------------------|--------|
| ア. 1874、 | 鳩翁道話・二の上、 | O'Neill、 | 木版和文・翻字・翻訳・注釈・語彙 | |
| | <i>A First Japanese Book for English Students. (Kiu-o Do-wa. Ni no Jo.)</i> | | | |
| イ. 1881、 | 鳩翁道話・一の上、 | Eby、 | 翻字・注釈・語彙 | |
| | <i>Kiūō Dōwa: Ichi no Jō. A Japanese Sermon Transliterated and Annotated with Vocabulary.</i> | | | |
| ウ. 1882、 | 心学道の話・うち21話を抄録、 | Knox、 | 活版和文・基礎漢字表 | |
| | <i>Shin-gaku Michi no Hanashi.</i> 英書名は序文より、表紙題箋は「心學道の話 全」 | | | |
| エ. 1889、 | 心学道の話・うち9話を抄録、 | Imbrie、 | 翻字・翻訳・注釈 | |
| | <i>Shingaku Michi no Hanashi.</i> 書名は序文より、Imbrie 1889 の 213-287 頁 XI 章に所収 | | | |
| オ. 1892、 | 鳩翁道話・一の上下、 | Eby、 | 翻字・注釈・語彙 | |
| | <i>Kyūō Dōwa: Ichi no Jō and Ichi no Ge, with Vocabulary.</i> | | | |

ウのノックス版『心学道の話』(Knox 1882) は、漢字学習を主眼とし、英語の序文と目次を除いてアルファベットは登場しない。もともと日本の一般大衆に向けて1842年に出版された『心学道の話』の原本は、読みやすさの配慮から平仮名を多用し、平易な漢字で書ける語句であっても平仮名で表記する場合が少なくない。また漢字には、ほぼすべて振り仮名が施されている。ほかの庶民向け読み物と同じく、平仮名さえ分かれば本書全体が読める表記法である。

ウは、原本から21箇所を逸話として抽出し、独自に活字の版を組んで1冊の和装本に仕立てたもので、本文は77丁(154頁)からなる。基礎的な漢字で書ける語句には漢字をあてているため、原本よりも漢字の使用率が高まっている。本文に先立って、7丁にわたり325項目におよぶ基礎漢字一覧表を掲げている(付録③参照)。例えば4丁表の「悪」には、右傍に「アク」また左傍に「オ」という2種の音を振り、さらに漢字の下に「アシ、ワルイ、ニクム」という3種の訓を振っている。ほかの漢字についても、漢字の左右に音読み、下に訓読みが、ともにカタカナで振られている。本表には単独の漢字のほか漢字列も含まれる。例えば「主人(右) シュジン(下) アルジ」1丁表、「夫婦(右) フウフ(下) メヲト」3丁表、「書物(右) シヨモツ(下) カキモノ」4丁裏、「父母(右) フボ(下) チハハ」5丁裏、「身體(右) シンタイ(下) カラダ」7丁表などの漢字語が含まれる。「身體」の直前に「身(右) シン(下) ミ」という立項が先行するなど、項目間に漢字の重複が見られ、これらを差し引くと、異なり漢字数は261字になる。

ウのノックス版『心学道の話』は、これらの基礎漢字261字とほか若干の漢字に関して、本文中で振り仮名を施さず、漢字だけを提示することで、学習者自身に読み方の確認を促し、学習が進むよう配慮している。基礎レベルを超える漢字には仮名が振られているので、振り仮名の有無によって、漢字の重要度が区別できる仕組みである。漢字の選択が恣意的

であるという批判は禁じえないが、漢字学習の範囲を限定し、初歩段階の目標を具体化したことは、初めて漢字を学ぶ人への良き指針となる。

ウのノックスが選んだ21話を、さらに9話に絞り込んだのが、エのインブリー版『心学道の話』である。これら9話はインブリー著『*Handbook of English-Japanese Etymology*』第2版の最終章(Imbrie 1889: 213-287 第XI章)をなしている。この日本語文法書の初版(1880年刊)はもともと第X章までしかなく、第XI章の SELECTIONS (from the *Shingaku Michi no Hanashi*, with a translation and notes) は第2版への増補改訂に伴って新たに加えられた。

この文法書の日本語はすべてローマ字表記のため『心学道の話』9話もローマ字化され、対訳と注釈が付されている。文法書の一章をなすだけあって注釈は文法的な説明に長けており、とりわけ文脈を利用した「は」と「が」の使い分けは説明がわかりやすい。

インブリーが9話に付した英語の表題はノックスと異なるが、各話の冒頭と末尾つまり原文からの切り取り方は1箇所(第7話 *In puris naturalibus* 冒頭)を除いて一致しており、両書の継承関係は明白である。これら9話は細部の表現において差異が見られるが(付録③参照)、ノックス版のほうが概ね原本に近いことから、ローマ字化に際してインブリーが表現に手を加えたものと推測できる。しかしインブリーが別の(未確認の)底本を参照した可能性も否定できない。

ア・イ・オは『鳩翁道話』を素材とするが、アのオニール版と、イ・オのイビー版とでは、教材化の狙いが大きく異なる。オニール版(O'Neill 1874)は、木版刷りの和本をそのまま読めるようになることを究極の目標とした教材である。英書名『*A First Japanese Book for English Students*』を内容に即して敷衍すれば、木版の和装本に初めて接する英語圏の学習者のための読解入門書と意識できよう。日本語そのものの入門書ではなく、和本を読むための入門書である。ちなみにオニールは英国人で、本書がロンドンで出版されたことを考えると、書名中の *English Students* は英国人学習者という意味に狭くも解しうる。しかし明治時代の有力英字紙『*The Japan Weekly Mail*』1874年8月29日の書評欄で好意的に紹介されていることから、本書の存在が遠く日本の英語社会に知られていたことがわかる。なお小稿で取り上げたテキストの編著者4名のうちオニールを除く3名は北米の人である。

オニールの『*A First Japanese Book for English Students*』は凝った作りをしており、左右見開きで、縦書き漢字仮名交じりの版本と、それをローマ字に転写し逐語訳・訳文・脚注を加えた横組みの頁とが、ひと目で対比できる体裁をとる。さらにアルファベット順の語句索引も備え、学習の便宜を図っている。たいへん手の込んだ労作であるが、活版本の急速な普及によって、木版本を読む必要性が薄れ、すぐに時代遅れの教材になってしまった。しかし今日、本書は新たな価値を帯びている。出版されたころ、同時代の日本語を学ぶ教材であった本書は、時をへた現在、江戸後期の版本読解入門用に活用が期待される。外国人の視点から懇切丁寧に解説された版本入門書は『*A First Japanese Book...*』がその名のとおり *First* にして、今のところ *Last* であろう。日本研究のために版本の読解を必要とする

上級日本語学習者は、全体からみればごく少数であるが、需要はつねに存在する。歴史に埋もれた本書の利用価値が再評価されてしかるべきである。

イ・オのイビー版『鳩翁道話』(Eby 1881, 1892)は、エのインブリーによる『心学道の話』と同じくローマ字を専用し、文字学習の労力を省き、日常表現の速習を旨とする読み物教材である。オの1892年刊『鳩翁道話(一の上下)』は、イの1881年刊『鳩翁道話(一の上)』に「一の下」を加えた増補改訂版である。両版はローマ字の表記法に変更があるほか、注釈や語彙の説明内にも異同が見られる(付録②参照)。綴り字の変更で特に目立つのは拗音の表記で、例えば「兄弟」は「kiōdai」から「kyōdai」へ、「百姓」は「hiakushō」から「hyakushō」へ、また「女中」は「jochiu」から「jochū」へと改められた。したがって書名も『*Kiuō Dōwa*』から『*Kyūō Dōwa*』に更新されている。当時はまだ日本語のローマ字転写法の模索期にあり、イビーの新旧両版はその変遷をたどる一資料としても注目される。注釈の変更では、例えば「こそ…已然形」の係り結びの説明が大幅に書き換えられた。「一の上」で「こそ…已然形」は(イもオも)本文の2頁と10頁の2箇所に見える。イでは2度目に登場する10頁で軽く触れる程度の注釈であったが、新版のオでは最初に登場する2頁でやや詳しく説明し、2度目の10頁の注釈は省かれている。

3 付録の解説

①オニール版『鳩翁道話』、②イビー版『鳩翁道話』、③インブリー版『心学道の話』の文字情報3種を小稿の付録とした。

①オニール版『鳩翁道話』つまり『*A First Japanese Book for English Students*』は、グループブックスがカリフォルニア大学図書館蔵本を電子化しインターネット上に公開している。付録①はこのサイトから得た文字情報に手を加えたものである。公開されているテキストは、アルファベットを光学式文字認識装置OCRで自動的に読み取ったもので、そのままでは誤りや抜けが多く実用上支障をきたす。不完全な文字情報を画像と照らし合わせ、OCRの読み誤りと欠落を修正・補足し、見やすいよう書式を整えた。

②イビー版『鳩翁道話』には、国立国会図書館蔵1892年刊「一の上下」のテキストに、東洋文庫蔵1881年刊「一の上」の情報を盛り込んだ。「一の上」に関しては1881年の旧版から1892年の新版に至る変更の箇所と内容がこの資料によって確認できる。

③インブリー版『心学道の話』にはノックス版と原本(奥田1842)の情報を加えた。前の第2節で述べたように、インブリー版の9話はノックスによるテキストの抄録範囲とほぼ一致するが、細部の語句に差異が見られる。そのような異同を原本とあわせて確認する目的で付録③を作成した。作成の手順としては、まずカリフォルニア大学図書館が蔵するインブリー版の文字情報をインターネットアーカイブから入手し画像と照合のうえ誤りなどを修正した文書に、青山学院大学図書館が蔵するノックス版の情報と、広島大学図書館

がインターネット上に公開する 1842 年刊行の原本の情報を盛り込んだ。また、9 話のテキストの後にノックス版の序文・目次・漢字表を収めた。

各付録の冒頭に、資料の見方や記号の意味など、注意事項をまとめた。付録は 3 種類とも、稿者（松本）が個人的に手作業で作成した資料ゆえ、不備もあろうかと思われる。疑わしい箇所については画像情報や原本の確認を願う。

参考文献

- 奥田頼杖／講話、平野橘翁／聞書 (1842) 『心学道之話』江戸：花蹊堂
 〈http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/?page_id=462〉
- 加藤咄堂／監修 (1928) 『心学道話全集』第 3 巻、忠誠堂 1～420 頁（通巻 857～1276 頁）
 に奥田頼杖「心学道の話」所収 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1913296>〉
- 金沢朱美 (2013) 「アーネスト・サトウ、ウィリアム・アストン、ジョン・オニールらを使用した日本語学習書の一考察：『鳩翁道話』を中心に」加藤好崇ほか編『日本語・日本語教育の研究：その今、その歴史』スリーエーネットワーク、163～175 頁
- 木坂基 (1980) 「心学書の文章」佐賀大学教育学部『研究論文集』第 28 集 2 号 (I) 114～128 頁、のち同氏 1988 年『近代文章成立の諸相』和泉書院 33～54 頁に所収
- 柴田鳩翁／著、石川謙／校訂 (1935) 『鳩翁道話』岩波書店（岩波文庫 青 52-1）
- 柴田鳩翁／著、柴田実／校訂 (1970) 『鳩翁道話』平凡社（東洋文庫 154）
- 柴田実／編著 (1971) 『石門心学』岩波書店（日本思想大系 42）
- 関山和夫 (1974) 「説教から落語へ」學燈社『國文學：解釈と教材の研究』第 19 卷 11 号（9 月臨時増刊号：古典落語の手帖）89～96 頁
- 延広真治 (1974) 「江戸落語の展開：心学道話との関連において」學燈社『國文學：解釈と教材の研究』第 19 卷 11 号（9 月臨時増刊号：古典落語の手帖）105～111 頁
- Eby, Charles Samuel (1881) *Kiuō Dōwa: Ichi no Jō. A Japanese Sermon Transliterated and Annotated with Vocabulary*. Yokohama: Kelly & Co. 東洋文庫蔵本
- Eby, Charles Samuel (1892) *Kyūō Dōwa: Ichi no Jō and Ichi no Ge, with Vocabulary*. Tokyo: Z.P.Maruya & Co. 国立国会図書館蔵本
- Imbrie, William (1889) *Handbook of English-Japanese Etymology, Second Edition*. Tokyo: Z.P. Maruya & Co. 〈<https://archive.org/details/handbookofenglis00imbrich>〉
- Knox, George William (1882) 『心學道の話』出版者不明、青山学院大学図書館蔵本
- O'Neill, John (1874) *A First Japanese Book for English Students*. London: Harrison & Sons.
 〈<https://books.google.co.jp/books?id=j0ARAQAIAAJ&hl>〉